
運命は蜘蛛の様に

しろめのくろねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命は蜘蛛の様に

【Nコード】

N4314L

【作者名】

しろめのくろねこ

【あらすじ】

幼児のような白髪の少女と聡明な王子の血筋への抵抗の物語

？（前書き）

また短編ものです

短編なのにながかったよう

テストも近いのに↑超私事

また昔のヨーロッパ風歪童話チックなお話です

作中の誤字脱字乱文は未熟者ですので少し目をつぶってやってくださいm(_____)m 汗

それでは召し上げられ

↓

？

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

栗はつめたいゆきの上をあるいていたの

ゆきはあしにはりつくようでふみだすたびに少しこわい気持ちになる

でもそんなゆきが栗はすきだ

「ふふふーんるらら」

楽しくなってきたをうたってしまった

木から零れたゆきがばさばさってふつて、栗のほっぺにあたって、
ひやってなった

もうすぐで”だんなさま”のおやしきだ

あと木の向こうのかどをいつつ曲がるんだよ、栗知ってるの。

右にさんかい

左にいつかい

ほらほらあとひとつ曲がればおやしきですよ

栗はカゴに手をいれておつかいがちゃんとできてるかもうつかい
かくにんしたの

ぶどうしゅがにほん

小麦のぱんとバターと”だんなさま”のキセルのはっぱ

うん！！栗、ちゃんとおつかいできましたのです

にゅひひって笑いながら

栗はさいごのかどを曲がったの

X X X X X X X X X X X X X X X

僕は小降りでありながら降り止む気配のない雪を見つめた

ずいぶんと冷え込む夜だ

まあ、僕にはあまり関係のないことなんだけどさ

どうせ僕、すぐ死んじゃうし

あの人を見つけれないのならこの世界に意味なんてない

急にさくさくという音が耳をついた

野犬？

身体を伏せて背の低くこんもりとした茂みに近づく

ここは街の入口からは随分と離れた森の中だから野犬や熊がでて不思議では全くない

息をひそめた後で

僕は自分に失望した

なんだい、さっきは死ぬ覚悟ができてるようなことを言ってたのに
やはりびびってるのかな

僕は馬鹿らしくなって身体を起こした

「ひとー」

「わっ」

さくさくとした足音の正体は人間だったようだ

「こんばんわっ」

「こ、今晚は…」

少女…といっても僕より年上みたいだ17、18ぐらいかな

でも印象は10に手が届かないぐらいの女の子って感じた

「でもってさよなら」

少女は僕にたいした興味はなかったようで踊るような足裁きで歩き
だした

コートは丈が随分と長い、片方の手にはカゴを、もう片方の手には男物の革靴をもっている

よくみれば少女は裸足だった

「ねえ！！」

少女はぴたっとまって「ぐるりーんちょ」といいながらこつちを向いた、意味不明。

「なんですかー」

「どこに行くのかなって。ここに人なんか住んでないし…」

少女はけらけらと笑った

「ありますよー。栗と”だんなさま”のおやしき」

少女…栗は名前だろう

栗は三十歩ほど先の道（や、表現が間違っている気がする。獣道と呼ぶのも躊躇うような茂みの隙間のことだったから）をずんずんと進んで消えた

僕は興味にそそれ栗の行った方向に視線を送ると視界の端に薄ぼんやりとしたランプの揺らめきがみえた

暗くて気がつかなかった
あれがおやしき、か。

僕は屋敷の方向に足をむけ小走りに栗の背中を追いかけた

「すとおぴーんぐ」

「ん」

ずずずずずずず

屋敷の門の少し手前までくると栗は振り回していた木の棒で足元に線を引きはじめた

「ひゃいっとな」

栗は元気よく線を飛び越えて屋敷側に立った

「これはなんの線？」

「おやしきとちびつことのさかいめだよ」

ちびつこ…僕なんだろうな

そんなことを言われたのは始めてだ

「ちびつこはこっからこっちは、めっ！…なのよ。わかるー？」

お姉さんぶり始めた栗をみてちよつといらいらした

「ふん、こんな屋敷入られたところでなんにもないだろ」

僕はそのちゃんな線を跨いだ

その刹那

「だーめだつてば」

「ぐっ…げほ、げほっ」

僕は喉を押さえた

簡単な理由だ

僕が線を跨いだ瞬間、栗は躊躇いなく僕の首に手刀をかましたのだ
それも手加減なしの

「ちびっこはわからずやさんだなあ。もう入っちゃだめだめなんだよ、じゃね」

栗は僕の額にでこぴん（勿論手加減なし。かなり痛い）をして鉄の門をくぐっていった

咳込みすぎて目がかすんだ

喉の振動で過労した目からは涙が少し零れた

「ーっう、なんだよあいつ」

しばらく僕は空腹も忘れ線と鉄門を睨んでいた

oooooooooooo

「さっむつーぞ。さっむつーぞ。ふふふん」

栗は今日もごきげんさんです

”だんなさま”はちかのおへやでおしごとをしてる

さつき朝ごはんに紅茶をもっていったらこさがだめだーっておこられちゃった

紅茶はカップごとぴゅーんってとんで栗のおでこにぶつかってわれちゃった。

なかみもどばーってなった

あれはかおがあっつかったなー

栗きゃーってなっついていっぱいあやまって床をいっしょーけんめいふいたら”だんなさま”はよしよしてあたまなでくれた

うれしかったよー

”だんなさま”はたくさんおしごとがあるからえーっと、じょうちよふあんてい？なんですな

栗かなしい！！よよよー

まどはぴっかぴかになった

次は、えと。

ゆきかきだ。昨日はいっぱいふったからたいへんだぞー

「おしゃー」

栗は”だんなさま”のお古のコートをはおって外にとびだした

門のそばには昨日のちびっこがねてたよ

こんなさむいのおそとでねるなんて、ちびっこはおばかさんだねえ

ざくっ

シャベルでゆきをかく

いつかいじゃ下の地面がみえないや。ふっかいなー

「栗…さん」

「おはよーちびっこ」

よくみたらちびっこはがりがりでボロボロだった

栗は”だんなさま”の「おまえは二つのことをどーじにできないからやくたたずだ」ということばをおもいだしてあわてた

しょーがないからかおはちびっこに向けたまま手だけでゆきかきし

ようとした

ざくっ

「あわわわいいああ」

栗はとびあがった

シャベルが栗のあしにぐさあってなっただんだ！！

”だんなさま”ごめんなさい。

栗は二つをどーじにできないや

「…なにやってんだか」

ちびっこはふーって白いきをはいたの

栗はそれをきれいだなーっておもって、それからなんだかちょっと
なきそうになっただんだ

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

朝目覚めたら自分の身体は雪に半分埋もれかかっていた

最悪に気分は悪いがなんなく四肢は動いた

僕はこんなに生命力があつたことに少なからず驚いた

寒さに震えていたら栗が門から軽やかにステップを踏みながらでて

きた

口笛を吹きながらシャベルで雪を掻いている

「栗…さん」

「おはよーちびっ」

年上ではあるようなので一応敬称はつけてみた

真冬の早朝はまだ薄暗い

空腹と、微熱の様な症状のせいでぼんやりしながら栗のシルエットの動きを眺めた

一筋のひかり

太陽が矢のように速やかに鋭く森を一瞬で朝に変えた

くらむ目に飛び込む異質なものに僕は目を見張った

朝日を浴びて雪よりなお白い

栗の、髪

更に眼球は濁ったミルクティーのような色をしている

「栗さん、その髪、それに目も…!!」

「？」

栗は容姿に異質な目をむけられることにも興味をしめさない

その上どうして僕が驚いているかすらわからない様子である

「ちびっこがりがりー。寒くないの？」

「寒いさ…腹も空いてる」

栗の雪で染め抜いたような白髪に嘆息しながらも、僕は意思でなく本能で栗が何か食べる物をくれないかと期待した

意思是…意地でも街人の世話になどなるものかという空しいプライドに覆われていた

「へー」

へーって…それだけ？

僕は落胆した自分に落胆した

少しでも街人に情けを期待した僕が恥ずかしい

死ぬ覚悟なんて、とうにできていたと思っていたのにな。

栗はまだ僕の事をじっと食い入るように見ている

僕はなにかを話さなきゃいけないような気がして慌てて話題を探した

「栗さんの栗って名前は本名なのか？」

「ほんみょー？」

本名がわからないのか！？

目頭を押さえた僕とは対象に、栗はスコップを地面に突き刺して腰に手を当てて自信満々に言い放った

「栗のなまえは栗だよ！いつからかな。わかんない。でもきつ
といつまでも栗は栗だよ」

本筋からずれている気もしたが気合いに納得させられてしまった

「じゃ、ちびっこのほんみょーはなにきゃね？」

本名の意味はわかっていなさそうだが本人は覚えた言葉を使いたいがために言っただけであろう

それを僕に聞くん

だ
苦笑して、それから

僕は栗の驚く顔がみたくなった

少し間をおいて、言った

「クルド・モンゴメリー」

「クルド？モンゴメリー？」

栗は口の中で何回も呟いた

目が泳いで首も僅かに前後に揺れている…正直気味が悪い

「驚いた？僕、これでもこの国の王候補の一人。ミシエル・モンゴメリーの血筋さ」

まあこんなこじきのような格好で信じて貰えるとは思ってないんだけどさ

ちらりと栗を見ると

栗もこちらを見ていた

いや、見ていたというのは語弊があるかもしれない

「ミシエル・モンゴメリー」

先程までのぼやけた表情はどこにもなかった

背筋が凍るほど憎悪のこもった視線で僕をいぬいていた

「ど、どうしたの。」

僕は恐ろしくなって一歩後ずさった

ざくっ

足音が無音の森に嫌に大きく響いたように感じた

その時

栗は一回びくりと肩を揺らしたかと思うと高速でなんども瞬きをし

て、最後に屈み込んだ

「栗さん、大丈夫？」

栗はゆつくりと僕を見上げ、こてんと首を右に傾けた

「だれ、これ？」

「え」

「栗、”だんなさま”のだんろのおそうじするのだ」

…

「どこからきたの、変なちびっこ。じゃあねっ」

質問と別れの挨拶を同時に済まし栗は門の向こうに消えた

僕はぐらぐらとする思考と身体をささったままのスコップに預けた

「今のは…」

白い髪、白濁した瞳

ちぐはぐな記憶

そしてモンゴメリー

「なんで揃っちゃうかな」

僕は額をスコップの持ち手の部分をあてて呟いた

「リイ姉…」

僕のたどり着いた答えがどうか間違っていますように。

oooooooooooo

なんかはなしをしろ、って”だんなさま”はいった

だから栗はうむーとかんがえてから、おおっもおもいついたの

「えと、もんのところにへんなちびっこがいます」

こんな所にかきがか

「がき？んとちびっこです」

どんなやつだ

「がりがりーでほねだらけ」

こじきか

「こじき」

きたならしいや犬のことだ
すぐにおいはらえ

「はいー…」

栗はうなずいたの
そしたらごろんってなった

くるしくてゆかをごろごろこぼれまわった

ふかふかのじゅうたんはきもちよかったけど、足が手が頭が
びりびりがくぐぐらぐら

「だんなさま、あ、」

くすりがきれたか

「あが、あ、あぐっ！」

栗は手をがんばってのばしたよ
”だんなさま”のところに

「おく、く、すりを」

ほらよ

おくすりの入ったふくろを”だんなさま”はへやのはしっこにほう
りなげたの

栗はぜえぜえして
よだれをだらだらして

もがきながらおくすりをとりだすといそいで口に入れた

「うげっ、え」っ

おくすりはすっごくにがい

いつかいのみこんでもすぐに口の中にもぐってきちゃっ

けど、はかないよ

はくと”だんなさま”はおくすりをおあずけにしちやうから

のんだか

「のみましたあ」

栗はおくすりがからだにはいったあとがすき

だってふわふわでとってもきもちいーのだ

ふわふわはしあわせ

そっうえばちびっこのかみもふわふわだったなあ

「あ、だんなさま。おもいだしましたです」

なにをだ

「ちびっこのことです」

もうきたないこじきのことなどどうでもいい

”だんなさま”は手をしっしってして栗にさがれとあいずした

でも…!

栗のはっけんすごいんだから。

どーしてもきいてほしくて栗はいったの

「ちびっこの目の中に虫がいたんですよ」

虫？

「くもにたかかも？かみのけでかくれちゃって、栗もったいなーっておもったの」

”だんなさま”はきゆうに栗をだきしめて、もう少しくわしくはなせ、っていったの

栗は”だんなさま”にくつついたままおはなしした

”だんなさま”はいいにおいがしてやっぱりすきだなーっておもったよ

?

X X X X X X X X X X X X

屋敷は予想以上に老朽化していた。少なくとも建築されて半世紀は
余裕に過ぎているだろう

「意外と簡単に入れちゃいましたー」

誰もいないが、報告。

一人で無口でいると、途端に屋敷の様に勇気が朽ち果ててしまいそ
うだったからね

栗が屋敷の中に入ったのを見届けてから正面以外の突破口が有るん
じゃないかと半ば投げやりな推測にまかせて探してみた

そして、なんなく塀が崩れてなんとか屋敷の敷地に入れる場所を見
つけた

全く、殴られ損である。

僕は嘆息した

僕はただ宛てもなく歩いていただけだったけど、堅牢な小屋にたどり着いた

なんか、感じる

そんな直感に任せて小屋の扉に近づく

案の定扉には鍵がかかっている

ダイヤル式の12桁南京錠

鍵といっても差し込んで回すものではなく、数字さえそろえば開くようだ

ただし、12桁、か。

はあ

僕は小屋の壁を一撫でする

屋敷とは違う最近の建築材をつかっているのは素人目にも分かる。かなり新しい。

怪しさ満天だ

「12桁か…できるかな」

僕は適当にダイヤルを回す

どうせ考えた所で数字の組み合わせがわかるわけでもないし。

すっかり白一面な世界に抵抗するように。真っ赤な手で、僕はダイヤルを回し続けた

2時間ほど過ぎただろうか

がちゃん

「…お」

鍵は感覚のとうになくなった手から滑り落ち雪に窪みを作る

「なかなか手間取ったなあ」

それでも、普通の人より何倍も早いんだろうけどね

扉を開けながら思う

望まない王家の血筋で一番役立っているのは間違いなく”この目”
と”直感力”だ

前髪でいつもは隠してる左目

蜘蛛眼、と呼ばれる王家の証

琥珀のなかに浮かぶ黒目の部分は確かに蜘蛛によく似ている

その目と関連があるかは僕にはわからないけど、モンゴメリー家の
血筋は直感力に優れる

分かる、のだ

どちらにいけばよいか、なにを選べばいいか、誰を信じればいいか。何となくだけど

故に一貴族に過ぎなかったモンゴメリーは瞬く間に他貴族を蹴散らし、僕の曾祖父にあたる人が実力で王座を奪い取ったのだ

「これは食べられそうだな」

小屋は採光のための天窓がいくつかあったから幸いにも物の識別には苦労しない

僕は非常食とみられる野菜の酢漬けの瓶を顎と肩で抑えながら蓋を開けた。指はとうに擦り切れていたから

一口

喉がひりつく。もうまともな食べ物を口に入れたのは片手の指で納まりきらないほどの昔だ。

もう一口

胃が荒れるようにいたみ、あやうく戻しかける

胃液が酢か。どちらともいえないすっぱさに涙ぐむ

それでも食べる。

粗食でも、こそ泥紛いでも、もう気にならない

欲しいものに手を伸ばすためならいくらでも生にかじりつく

生きていく意味を見つけてしまったから、もう飢え死にはただの負

けでしかない

「ふむ」

吊してあった干し肉をかじりながら（かなり顎に無理が生じているからほぼ吸っているようなものだけだね）僕は食糧の棚の奥にぎっしりと詰まれた木の箱を手にとった

「薬…か？」

中には固化化した小さな飴色をしたものが入っている

薬の表面にはh e a v e n と彫り込まれている

「楽園」

なんのことだろう

木の箱をいじくと底の部分に海を隔てた小さな島国の名前が描いてあった

「うわ…最悪。」

分かつちやつた、これ

麻薬じゃないか

島国はこの国に支配されている諸国のなかでも優遇されている節があった

鉱石が採れず、作物もそれほどとれる訳でもないのに。

前から不思議に思っていたが、裏で麻薬の売買をしていたわけですか
僕が干し肉をしゃぶりながらしげしげと木の箱を眺めていると扉が
急に開いた

風が吹き込んだのかと思い、ゆっくりと振り向くと

白い雪の逆光を浴びた黒い影

………人の？

お

額に猟銃をつきつけられた

「お前、どうやってここに入った」

男は静かに、しかし雷鳴のように割れた声で僕を凄んだ

僕は死ぬかな、と思った

oooooooooooo

栗が”だんなさま”とおはなししてからいっぱいじかんがたった

そとはもうゆうがたっばい

おおっ、ゆきがオレンジでとってもきれいなー

”だんなさま”は今はいない
どこにいるかもわからない

けど、このやしきにいればへーき。そのうち会えるっしょ

「そっれかつら、バター」

栗はうたいながらバターにナイフをつきさしてぐりゅんってしてと
ったの

テーブルにはバターをぬったパンがずらずらずらーっとならんでい
るのよー

「この子でさいごー」

さいこの子にバターをぬりおえるとかまどにならべたパンを入れる

…つぎは火だあっ!!

火をつけるときは手がぶるぶるーがくがくーってなるの

まっちをこする

ぽきっ

「むっ
」

まっちをこする

ぽきっ

「うぎゅっ」

まっちをこする

しゅばばー

「おーし！…ていつ」

栗は火をつけることにせーこーしました、よっしゃー

「いーにおいねー」

栗

「”だんなさま”っ」

しごとがある

早くこっちにこい

「えー、でもパンがー」

”だんなさま”は栗のほっぺたをてのひらではしーってたたいた
くちこたえするんじゃない
さっさとくるんだ

「っづ…、はい」

栗はひりひりするほっぺたのまま”だんなさま”についてったの

「ちかのおへやっ」

栗はうれしかったあ

だってちかのおへやのおくにまだみちがつながってるっていまわかったから

きよろきよろしてたらさぶくつてふるえちゃった

そとよりさむいし、ちょっぴしくらくてこわーい

でもとってもわくわくー

「栗のおしごとってなんなんですかー」

すぐにわかる

かつーん、って音がした

”だんなさま”はかべからせんがいっぱいおりてるへやをゆびさしたの

「あ、ちびっこ」

栗はせんのあいだからちびっこにさわろうとしたけどとどかなかつた、ちえっ

くうほうをうつただけできせつしやがった。ちゃちなおうじだ

「ちやち」

ばかな栗にはいみはわかんなかったけど

そのひびきはちびっこにとってもにあってるきがしたの

「ちびっこ、おい」

しばらくはめをさまさない

おまえはこいつをかんししろ、いつおうけの力をつかうかわかった
もんじゃないからな

「かんし」

ずっとみてるということだ

「わかりましたっ」

栗はにこーっとわらったの

”だんなさま”は栗のなぐられたほつぺたをなでてから、おきたら
つたえにこいっていつてちかのおへやにもどった

”だんなさま”のなでてくれたところがあったかった

へへーと栗はわらった

そこに手をかさねたまま栗はいいつけどーりにちびっこを”かんし
”するっ

はやくおきないかなあー

X X X X X X X X X X X

目を開けた瞬間に目が合うというのはなかなか奇妙な気分だ

「おきたっ」

「栗さん」

僕は起き上がろうと鉄格子をつかんだ

と思ったのに

手は鉄格子にさわることなく間の空間をつかみ、バランスを崩して再び地に臥した

「ちびっこなにやってんだー？ひまなの？」

「…ちがいます（君にだけは言われたくない）」

僕は耳の付け根をぐりぐりともんだ

さっきの空砲でうずまき巻でもやられたのかな
平行感覚を失って気持ちが悪い

でもまあ、よしとしようか

生きてたし

それに…

「ふぎゆ」

外側から栗さんの手が伸びてきて僕の頬をつまんだ

「ちびっこのほっぺたぶにぶにっ」

僕はまじまじと栗さんをみた

やはり白い髪が一番に目に入るが、今は気にしないことにする

「栗さん、あそこなんかいる」

「ふむっ？」

指差す先にはなにもないが栗は鉄格子に額を押し付けて牢の隅を凝視する

僕はそのすきに栗を凝視する

…やっぱあった

「なんにもないじゃないかー」

「ごめんね、見間違い」

ちびっこのおばかーと弱々しげに詰り、あくびをした

「あ、”だんなさま”につたえなきゃだー」

栗はふらふらと立ち上がり”だんなさま”とやらの部屋に向かおうとする

やばっ

「まって」

僕が手を限界まで伸ばすとなんとか栗の細い手首を掴めた

「ひょあ」

栗は引つ張られるままにたたらをふんで尻餅をついた

「おくすりがきれたかもー」

目の焦点かばやけている

両手は薬を求めるように僕の鼻先で開閉を繰り返す

僕はふいに泣きそうになった

この人の過去と現在、それに未来を想って、泣きそうになった

そして、その未来を与えるのは
きつと僕だ

僕は内ポケットからソレを出して、それから。

「栗さんこっち向いて」

「んー…」

「ちびっこ…苦しいよ」

「飲み込んで」

「これって」

「いいから、はやく」

彼女が目を覚ました

「リゴレット」

「…？」

「君の名前」

彼女はわらった

栗は栗だよという顔をして

「 ” だんなさま ” の顔を思い出してみて、リゴレッタ」
「 ……」

栗は口をぱくぱくとさせるが声はでてこない

しばらくすると頭に疑問符をだして首をこてんと倒した

「 わかんない？ 」

「 …… 。 」

微かに頷く

思い出せないことが心底不思議という目をしている

「 ” だんなさま ” は今から僕だ」
「 …… ？ …… ？ …… 」

僕は栗の目を掌で覆って耳元でもう一度囁く

「 もうなんにも怖くないよ
ミシェル・リゴレッタ」

息をのむ音がした

覆った掌のしたから、大粒の涙が顎のラインを辿る

記憶を失っても

知能が消し去られていても

魂の根っこは^{なまえ}真実をわすれていなかった

「ずっと会いたかった…リイ姉」

「だ…んなさま…」

僕は唇を強く噛む

ずっと探してた。

リイ姉を見つけた

今僕の腕の中にいる大切な人

僕は忘れられないんだ

いや、忘れたくない

忘れない

利発なリイ姉の覇気のある声

忘れない

長くてさらさらのブロンドの髪

忘れない

リイ姉が誰より賢く誰より気高く誰より美しかったこと

でもいいんだ。

例え今のリイ姉が幼稚で、我が儘で。声は張りを失っていて、髪は白く短く、手足は驚くほど細くても。

生きていてくれれば、十分だ

ただ、一番辛いのは

彼女の中に僕はいないという事

彼女に残っている感情は

もう依存だけだから

僕は鉄格子越しにリイ姉を強く強く抱きしめた

リイ姉はだんなさま、だんなさまと嬉しそうに繰り返した

ナニカが終わってしまった
ナニカが始まってしまった

「リゴレッタ」

「なんですかあ」

「頼みがあるんだけど」

「まかせといてくださいっ！」

リイ姉ごめん

幸せを奪ってごめん

でも、もう戻れないんだ

「今から話す事、ちゃんとできるかな」

僕はリイ姉の前髪を弄びながら作戦を伝えた

≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡

「くそっ」

何故王子がここにいるんだ

羽ペンにインクに浸ける度に身体中に怒りが蝕まれるきがした

羊紙皮には王宮にあてた文章

内容は勿論あの王子についてだ

「話が違うぞ!!」

流石に候補であるとはいえ、姫と王子が短期間に消えるのはまずい

人民の間でも現王の弟の娘である美しく利発な姫と、現王の第四子の優しく聡明な王子はとても人気がある

そろそろ限界だ

「いつお節介な英雄気取りが」私が姫と王子を探す」と旗を掲げるか分かったものでない

俺はペンを走らせる

はやく使いの者を寄越して、気づかれないように王宮に戻すように、と。

「すいませーん」

急に栗が入ってきた

「えーっと、だん…ちがった。ちびっこがおきましたよう」

俺はペンを置いて立ち上がった

「お前はもういい。下がってろ」

栗は口を尖らした

今まで見たことがない表情だ

気にはなったが今優先すべきは王子の様子だ。

薬漬けの元姫など、今はどうでもいい。栗はもはや俺の家畜に過ぎないから

元の名前はなんだったかすらわすれた、俺には栗で十分だ

扉を閉めて地下よりなお下にある牢へと向かった

？

X X X X X X X X X X X

かつんと硬質な音を立ててだんなさまなる人が降りてきた

「調子はどうだい王子様」

「ええ、お蔭さまで最悪です」

そりゃよかった、と笑う

耳に障る雷の声

「少しお話してもいいですか」

「なんだ、へたれた王子かと思えば随分と落ち着いているじゃないかねえか」

「もう落ちるとこまで落ちてしまいましたから」

ふん、と鼻を鳴らされた

きつとこじきのように僕は無力なガキとしか思われていないだろう

シヤクに障るけどそれでいい

せいぜい油断してろ

「僕はこれからどうなるんですか」

「安心しろ。手紙をだしてすぐ王宮に連れ戻してやれるだろうさ」

だけどな、

と男は下世話に笑った

「きつとお前は王宮で殺されるだろうさ。…栗が姫だって気づいてるんだろう？」

「ええ」

ばれてたか

隠しても無駄ならそれでいいや

「あなたは僕を殺さないのですか」

「ああ。お前は今行方不明だと知れてしまっているからな。一旦王宮に戻った所を見せなければ人民は事件性を疑う」

男は意外と頭がキレるようだ

「ただそのあとは、たまたま戦で偶然に死んじゃうって未来なんだろうな」

たまたま？偶然？

嘘臭い

つまり王宮に帰ったら、死ぬと

…？

「なんで姫がここにいるとばれたら僕が殺されるんです？危ないのは姫を誘拐したのがばれる貴方の方じゃないですか」

男はきよとしたあと大声で笑った

石造りの牢に反響する。不快。

「はは、お前知らないのか。栗がここにいる理由」

理由？リイ姉はこの男にさらわれたんじゃないのか

「栗をここにやったのは、ミシエル・モンゴメリーだ」

「は？」

何を言ってるんだ

現王が姪を追い出す理由などないはずだ

「聞かしてやろうか。

死ぬ前の餞に真実を」

僕は嘘だと口中で呟きながらも
小さく頷いた

男は口角をあげて語り始めた

ミシエル・モンゴメリーは頭がきれ、戦いでは鬼神の如く敵を切り裂く実力派の王である

これは本当の話

だがこれは世間一帯に知れている表の面に過ぎない

現王は強欲だ

欲は誰にでもある

欲のない者は生きる意志のないのと同じだ

だが現王は尋常ではなかった

他国を攻め、略奪し

奪えるものは全て奪った

また知られていないが

現王は女好きだ

現王には妻がいるって？

そうか、お前はそれも知らないのか。可哀相に。

あれはお前の母親じゃないぜ

おいおいそんな目でみるな

現王妃は現王の実の妹だ

…隠してるようだがな

お前だけじゃない。お前の三人の兄も全員違う母親だ

お前羅全然似てないじゃないか

気づかなかったのか？

その顔、薄々は感ずいてたつて感じだな。まあいい。

とにかく現王妃は形式上王座に座っているに過ぎない

現王は狂ってる

妻を一人目のガキを産んだ瞬間に殺すんだ、何の躊躇もなく
趣味みたいなもんなのかもな

それで栗の話か

栗は今はいんなんだが、ここに来る前は絶世の美女だったよな

ああ、お前のが詳しいか

悪い悪い。

現王がそんないい女見逃すと思うか？

現王は栗に言ったんだ、俺の妻になれってさ

そしたら、傑作だ

あいつ騒ぐこともなく護身用の剣を自分の首に当てて

「それ以上その汚れた手を近づけるのならここで死にますよ」

だってよ、わらっちまうな

現王はそれは驚いてたな

当たり前か。現王は自分の望んだもので手に入らないものなんてないと思つてたんだから

俺は現王に聞いたさ、殺しますか？つてさ

ああ、俺はこれでも現王の近衛だったんだぜ

そしたら現王は急に大笑いして俺に命令したんだ

こいつを薬漬けにしろ、って

俺はここに姫を連れてきていう通り栗を薬漬けにした

意外とタフな姫だったからここまで抜け殻にするのに偉く時間がかかったがな

栗をもう一度現王の所に連れていくまでが俺の仕事だ

現王がそれから何をする気なのかは俺の知ったことじゃない

ただ、死ぬよりもつと辛い目にあうのは確かだろうな
よりによってあの現王に恥をかかしたんだからな

…馬鹿な王子さ、お前

もう少し我慢して王宮でまっていれば栗に王宮で会えたかも知れない
のにな

ただしその頃にはかつての姫の面影はなく、言葉も人も記憶もなん
にもない本当の抜け殻になっているだろうけど

男は話終え、ふうつと息をつく

僕はまだほうけている頭を振る

一度に多くの話を聞きすぎたせいで身体もふわふわしている

男の話がどこまで本当かはわからないけれど

ただ、学んだことがある

一つ、もう僕らは王宮に戻れないということ。

「なんだ、ショック過ぎてお話もできないかい王子様」

「一つ聞きたい事があります」

「なんなりと」

「薬漬けにするのは本当はこんなに長く時間がかからないんじゃないんですか」

なんだ、そんなことかと男は引き攣った笑みを浮かべていった

「あいつなかなか調教のしがいがあったからさ。随分ながく遊んじまった」

言葉が耳に触れた瞬間

一気に沢山のものが脳裏に流れこんできた

細すぎる手足

抱きしめたときにみつけた首の痣、引つ掻き傷、火傷の跡

学んだ事ふたつめ。

こいつは絶対に赦さない

「リゴレッタ!!」

僕が呼ぶと扉は勢いよく開いた

≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡ ≡

扉の向こうにいたのは栗だった

なんだ驚かせやがって

王子の近衛でもでてくるかと思ってひやひやしちまった

栗がこっちに向かってよたよたと歩いてくる

歩く度にずつ、ずつと音がする

…なんの音だ？まあいい

「栗、猟銃とつてこい」

王子が眉をひそめるのがみえた

「噂通り頭の回るやつだつて分かった。王宮で殺される前に行動を起こせられたらたまったもんじゃねえからな」

ここで始末する

どうせ殺されるんだ。

現王も計画のためにやったことなら多めにみてくれるだろう

「じゅーならあるよ」

「ん？」

よく目を凝らす栗が引きずっていたのは俺の猟銃だ

「用意がいいな」

「…」

栗は俺を見ていなかった

目線の先にはずたばろの王子

王子が小さく手を振ると栗は嬉しそうにジャンプしながら

「だんなさま！ー！リゴレッタ、ちゃんとがんばるからねっ」

… どういう事だ？

俺は軽くパニックになる

「お前、栗になにしゃがった」

「あなたと同じことをしただけです」

「貴様っ…！！」

ガチャン

耳慣れた弾丸装填の音

振り向くと栗は笑いながら銃口を俺の方にむけていた

oooooooooooo

リゴレットいい子だから” だんなさま” のゆーことちゃんとできたんだよ

「わるいやつ」のへやにいておっきなじゅうをもつてきた

おい、栗！とちくるうんじゃねえ。だんなさまはおれだろ

” わるいやつ ” はぎやーぎやーとづるさいなあ

ぱあ
ん

「おー」

はずしちゃった

じゅーのたまは” わるいやつ ” のうしろのかべにはねかえってころがったの

やめろ栗！！

ぱあ
ん

あ、あたた

「わるいやつ」はみぎのもをおさえてごろごろしてる

いのちろっ！

” わるいやつ ” はリゴレッタにつかみかかってきた

「じゃま」

”だんなさま”のかおがみえない

ぱあん

こんなちかくじゃはずすほーがむずかしーよね

”わるいやつ”はゆかにくずれてあああああっていつてる

リゴレッタたのしくなつて
いっぱいうつた

ぱあんぱあんぱあんぱあんぱあんぱあんぱあんぱあん

「もういいっ！！！」

「”だんなさま”？」

リゴレッタはあながいっぱいあいた”わるいやつ”をふみつけて
だんなさま”にかけよったの

”だんなさま”はないてた

ぼろぼろって目から水がいっぱいでてきてたよ

それからリゴレッタを前からぎゅうつとだきしめてくれた

きゃー、リゴレッタてれちゃう

”だんなさま”はなにかをいっぱいさげびながら大声でないてた

リゴレッタはぎゅーってなってるのはくるしいけどうれしかったからにこにこしてたの

”だんなさま”はあさがくるまでずっとないて、ねちゃった

リゴレッタ、そのあいだすっごくしあわせだった

でも”だんなさま”がずっとないてたから、なかみの水がなんにもなくなっちゃうんじゃないかって

それだけがしんぱいだったよ

+++++

それから何年たっただろう

「おい、ケビン来てくれ」

「なんか見つけたかアッシュ」

ケビンは落ちているシャンデリアを飛び越えてアッシュの側によった

「げ、白骨」

「しかも子供だ」

ゆかには朽ちた白骨が重なっていた。二人分：か？

「おいおい、こそ泥のつもりがやーなもん発見しちゃったぜ」

「ケビン、お前”葬送の陣”って描けたよな」

「げ、まじかよ」

やれってか？とケビンは面倒くさげに言ったがアッシュは真剣な面持ちだった

アッシュは変な所で常識人だ
もともとこいつは盗人にむいていないな、ケビンは苦笑した

「でーきたつと」

ケビンは汗を拭う

式陣ひとつでも、魔術を少しかじった程度の実力のケビンには重労働だ

「”従獣”はお前が捕まえるよ」

そういつて早々と腐りかけたソファに寝転ぶといびきをかきはじめた。アッシュは呆れた

従獣：葬送の陣を使うには冥界に魂を導くために獣を捧げる

獣といっても、蟻、蛾、魚などくに生き物に指定はない

アッシュが黙考していると目の前に黒い子蜘蛛が二匹通った

「すまないな」

アッシュが手を差し出すと躊躇いなく二匹は掌に収まった

二匹を陣の中に入れ、アッシュは慣れた様に葬送の呪を唱える

勢いよく陣内が燃え上がる

触れても熱くない白い炎が

アッシュは見たこともない

二人の子供の為に祈った

どうか次世では幸せに、と。

「ケビン、終わった。いこう」

間抜けな声をだして相棒が起き上がる

玄関口に向かいながら、たいしたものなかったよなあとケビンは悪態をつく

アッシュは確かになど苦笑する

玄関の扉を閉ざす直前

アッシュはなにかに惹かれるように後ろを振り返る

長い廊下が続いているだけだ

「アッシュ置いてくぞ」

「ああ」

扉を閉めて、アッシュは相棒の元に向けよっていった

彼らは知らない

二人の子供はこの国の王子と姫であつたことを

薬漬けの姫は最早手遅れだつた

昨日の星空を、今日の朝ご飯を、数秒前の会話を思い出せなくなつていった

姫は亡くなるその瞬間も王子が誰であるかを思い出すことはなかった

彼女にとって彼は最後まで

敬愛すべき”だんなさま”でしかなかった

王子はそれでも笑って姫の頭を撫でた

そして姫が亡くなったのを見届けた後、すぐに猟銃で心臓を撃ちえ
ぐり死んだ

二匹の子蜘蛛をアッシュが見つけたのは偶然だったのだろうか

さあ、だれも知らない

ただ蜘蛛の脚の様に絡み合った血筋という名の呪いから地上に縛り
付けられていた子供達は

ようやく解き放たれた

砂塵となって空を翔ける

高く、高く。

.....E.....

？（後書き）

どうでしたか！！

だいたい作品が自己満足で終わってしまうのが申し訳ない限りなのですが楽しんで頂けたならば幸いです

個人的には最後の盗人二人組のケビンとアッシュが気に入りましたので、また使える時がくるといいなあとか思ったり…W

あ、正せよ祖国もテストが終わったら進めますので

もう少し待っててください！！

では次作で

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4314/>

運命は蜘蛛の様に

2010年10月9日17時19分発行